

ふるさと霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第110号 (2015年7月)

風に吹かれて (88)

白井啓治

『梅雨明けはまだかと問うたら』

これからが本番だと風のいう

「ふるさと風の会」の9周年展と「ことば座」第28回定期公演が終わり、ホッと一息ついたらもう今年の折り返し点となってしまった。時の移ろいの何と速いことかと感じしている中に、どんな年寄ってしまう。年寄ることに嘆く訳ではないが、溜め息は刻々と大きくなる。

嬉しいニュースがあった。風の会の応援者で、小生の数少ない茨城の友である美浦村の市川紀行兄が会長を務める「陸平をヨイシヨする会」が、文化財保存全国協議会より歴史的環境を保存する活動をする団体・個人に贈られる「和島誠一賞」を受賞した。快挙である。

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える当会にとって、範とする先達者「陸平をヨイシヨする会」が和島誠一賞を受賞されたことは嬉しく、愉快この上ないことである。

継続は力、とは言うが、活動は確りと続けなければ力のある継続にはならない。陸平をヨイシヨする会の受賞のニュースは、当会にとっても継続への素晴らしい風を送って頂いた。

活動とは、活々と行動することである。しかし、活々した行動を継続させることは簡単な事ではない。日々新しい発見を志向した視線を持つていなければ難しいことである。

6月20日、21日に開催した「ふるさと風の会9周年展」「ことば座28回定期公演」では、これまでにない新しい来場者を迎えることが出来た。

今回は、会員の伊東弓子さんが中心となって活動されている「玉里御留川を歩く会」が初参加された。来場の方々には玉里御留川の資料等の展示に興味を持って見学頂いた。

また、会員の木村進さんが発信しておられるふる里の歴史文化を再発見するブログ「まほらにふく風に乗って」のブロ友の方が来場くださった。

そして新しい来場者の方々には、ことば座の公演も観劇いただくことが出来、例年になく活性が起ったことは嬉しいことである。

ことば座の観劇も、小林幸枝さんを応援する聴覚障害者の方々定着、広がりを見せている事も嬉しいことである。朗読手話舞と言う表現がかなり認知され、特別に一公演60人に縮小設定したギター文化館で、毎回20名を越す聴覚障害者の方々来場くださった。健聴者と一緒に楽しんでいただける舞台は、全国みてもギター文化館にしかないであろう。クラシックギターの演奏を中心に、ふ

るさとの文化発信地としてギター文化館が大きく枝葉を伸ばしてくれたいことを願ってやまない。一粒の種をまかなければ、大地に実りは生まれない。しかし、その一粒の種が必ず実りをもたらす確証はない。それでも種はまかなければ、大地は不毛の砂漠に化してしまう。

美浦村の「陸平をヨイシヨする会」の嬉しい知らせは、当会ばかりではなく霞ヶ浦周辺地域に継続は力であることを示し、大きな希望の火を灯してくれた。

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

「水」の起源を探る

菅原茂美

人体の70%は水である。ではその「水」は、どこから来たのか？ 海はどうやってできたのか？ 命溢れる水の惑星は永遠なのか？

地球の表面のほぼ3分の2は海である。地球が誕生して約46億年。浅い海の底で、有機物・水・熱などを原材料として、生命が誕生してほぼ40億年。単細胞時代を30億年経過して、今から10億年前、やつと多細胞生物へと進化。命溢れる惑星へと発展してきた。

そしてついに^{3,6}億年前、脊椎動物は上陸を敢行。魚類↓両生類↓爬虫類↓哺乳類と進化を遂げ、霊長類の頂点に立った大型類人猿の中から、700万年前、直立二足歩行する人類は誕生した。

生物の歴史は簡単に、しかも順調に進化を遂げて今日に至ったものではない。全生物の75%が絶滅するような大事件が、少なくとも直近6億年間に5回も繰り返している。例えば⁴億年前のオルドビス紀末大量絶滅は、地球の超寒冷化が原因であり、⁵億年前のペルム紀末のそれは超温暖化である。その他、海洋の酸欠や酸性化などであり、要するに他の惑星などによる重力干渉により、地軸が狂うなど、環境の急変に生物の進化が追い付かなかったという事である。

そして大量絶滅の後、必ず爆発的に新たな生物が大繁栄を繰り返す。それが地球の生命史である。そして最後の大量絶滅は、今から6500万年前、直径10kmの巨大隕石が、中米ユカタン半島に衝突してきて、全盛を極めていた恐竜が滅亡した。

恐竜が大繁栄の真っ最中、その陰で怯えて生きていたネズミ大の、しかも地球初めての恒温動物

「哺乳類」は、今から2億2500万年前に爬虫類から分岐して誕生したが、恐竜が消えた後の空間を埋めていく。その中で「食虫目」(モグラなど)の中から、霊長類が生まれ、大型類人猿へと進化し、今から700万年前、大脳容積500gほどの「人類」の元祖が誕生する。その子孫が今日、猛烈な勢いで繁栄を続け、今や第6の大量絶滅を起こしかねない強烈な「環境汚染」を引き起こしている。

生命史において短期間とは、百年や千年ではなく、何万年という期間を言うのであり、今や人類という異常繁殖をする動物により、大量絶滅が進行中と言われ、それは自然現象ではなく全く人為的なものである。

人類が1万年前、農耕・牧畜の定住生活開始から、今日の経済優先の不定見な時代を経て、水銀や放射能で土壌や海を汚染する。しかも乱獲の限りを尽くし、やがて数万年の中に第6回目の悲劇を起こしかねない現況にある。

その人類が自己を認識し、地球や宇宙を認識できる頭脳を發展させた。そして「自分とは何ぞや」と問いかける頭脳を獲得した。己の精神面の分析は勿論だが、自分の体を造っている物質の起原は一体どこなのか？ 深淵にして永遠の課題に挑戦したい。自分の体の7割(新生児80%、成人60%)を占める「水」は、一体どこから来たのか？ (以下細かい数字などは「日経サイエンス」15年6月号他を参考)

*

【宇宙は、「時間」と「空間」の区別がつかない一種の「無」の状態から忽然と138億年前(正確には137.88億年前)に誕生した。遠方の銀河がハッブルの法則(遠くの銀河ほど遠ざかるのが早い)に従って互いに遠ざかっているという観測事実が明確に

なり、宇宙は膨張しているという結論が得られた。宇宙膨張を過去へと外挿し、スピード及び方角から起始点を逆算すると138億年前、現在の「てんびん座」の方角で宇宙は誕生した。宇宙の初期は全ての物質とエネルギーは、一か所に集まる高温・高密度状態にあったことになる。この状態からの爆発的膨張を「ビッグバン」と呼び、それまで科学者達は、宇宙は定常的なもので、宇宙膨張論は空論であると考えていた。】

*

さて、宇宙を構成する成分だが、最新のデータによれば、暗黒エネルギー68・3%、暗黒物質26・8%、原子4・9%である。

【物質の成分にエネルギーとは腑に落ちない話であるが、アインシュタインの方程式 $E=mc^2$ によれば、物質とエネルギーは等価なのである。】
夜、天空を眺めれば多くの星や銀河で満たされ、いかなる元素で構成されようとも、地球の構成成分とそうは変わらぬ物質で満ち溢れているように見える。しかし、現在の物理・化学で人類が認識している原子からなる実際の物質は、わずか5%足らずで、その他は暗黒エネルギーや暗黒物質なのだそうだ。

宇宙膨張のエネルギーは、既知の物質の質量による引力(ニュートン力学)など全く通用しない、想像もつかない言わば「マイナスの引力」又は巨大な「斥力」という概念を導入しないことには理解できない事象とのこと。そのような力により膨張が続いているという。そして宇宙は、無限大に膨張を続けるのか、いつの日にか、そのエネルギーも尽きて、逆に縮小に転じる(ビッグ・クラッシュ)の物質と時空を無次元の特異点に収束する)のか、全く想

像もできないとのことである。

*

さて本論の「地球の水」はどこから来たか？
結論からいえば現在、明確な証拠が十分出揃ったとは言えないが、現在世界中の科学者により支持されているシナリオは次のようなものである。

現在宇宙を構成する原子の数からいえば最も多い原子は水素(H)であり、2番目はヘリウム、3番目は酸素(O)である。ヘリウムは化学的に不活性だが、酸素と水素はすぐ結合し、水を作る。(なお宇宙の元素の重量比では酸素62・6%、炭素19・5%、水素9・3%、窒素5・2%の順である)。酸素や水素を多く含む原始雲のガスは、太陽や巨大ガス惑星に吸収されたが、それでも、太陽系の岩石惑星に吸収される水分は十分過ぎるほど存在し、地球の岩石にも水分は大量に含まれる事となった。

我が太陽系の成り立ちには、まず現在の太陽があるあたりに先代の恒星が存在し、老化して爆死し、宇宙空間に星間物質(塵埃+燃えカス)となつて飛散した。それからしばらくして、今からほぼ46億年前、まず現在の太陽の位置に飛散した物質が徐々に集合し、その引力で次から次と物質を引き寄せ、巨大な質量に成長し、その圧力により内部で核融合反応を起こし恒星の卵が誕生する。太陽誕生と同じころ、現在のガス惑星(木星や土星等)が太陽を中心とした円盤上に次々誕生し、次いで、太陽に近い部位に、重い元素からなる岩石惑星(水星・金星・地球・火星)が誕生する。外縁部のガス惑星や小天体には、水分が非常に多い。

原始地球は砂粒が小石に、小石は岩石に、岩石は更に多くの岩石を引き寄せ、更に微惑星などの衝突を受け成長する。45・5億年前、星間物質

は太陽と巨大ガス惑星を誕生させ、次いで、我が地球など岩石惑星が誕生する。

原始地球は、次から次と起こる小天体衝突の熱により火球の状態であった。中心部は重い元素の鉄などが溶融した中心核を形成する。火球ではあつても「含水鉱物」の形でマントルに水分を保有し、地球が冷えるに従い、内部の水分は表面に浮かびあがってくる。しかし、地球誕生から、1億年(44・7億年前)して、火星大の微惑星(ティア)が地球に衝突してきて地球内部まで揺らぎ、大気は吹き飛ばされ、地球物質と微惑星の破片は地球周辺を周回する間に合体成長して、「月」が生まれる。月は地球の引力を脱しきれず、地球を回る「衛星」となつて今日に至る。

微惑星の衝突熱などにより失われた軽い元素や水蒸気は、その後、続いて衝突してくる彗星や小天体などにより、多くの水分が供給され、更に火山活動により、岩石に含まれる水分が空中に蒸散し冷却して、雨となつて地球を冷やし、ついには「海」を形成する事になる。しかし最近の研究では、彗星は氷の塊のようではあるが、これが地球への水分補給の主体ではないとする報告が多い。

原理は現在の地球の水分は、水素原子の同位体(重水素)含有率は、彗星の水のそれより2/3分の1と少ない。彗星ではなく、火星と木星の間にある小惑星帯(メインベルト)からの天体の衝突により、地球の水分の大部分はもたらされたという報告が主流を遂げつつあるとの事である。メインベルトには、纏めればおよそ1個の惑星に相当する質量の小惑星・隕石などが無数にあり、多くの水分を蓄えているという。

さて地球が誕生して数億年経つと、メインベル

トからの重爆撃は急激に減少する。地球が冷却してくると、冷えた地殻は重いから沈みこみ、温められたマグマは上昇してきて火山噴火を起こし、大陸は成長し、プレートテクトニクスで陸地が成長・分裂を繰り返して、今日の大陸と大洋が形成された。地球表面の3分の2は海なので、どうみても水の惑星即ち「水球」と呼びそうなものなのに「地球」と名付けた理由はわからない。

大洋の平均水深は4000mで、地球の質量の0・02%の水分を、更に岩石に含まれる水分も0・02%であり、地球質量の0・04%が水である(ただし真水は3%、海水97%)。水は地球表面の大方を覆っているのだから、生命誕生には極めて条件が揃っている事になる。

*

惑星に生命が誕生するためには、多くの条件が揃わないと、奇跡は起きない。まず惑星の位置は、太陽からの距離が重要である。近過ぎれば、太陽熱の放射により、水分は悉く蒸散してしまう。遠ければ太陽の熱が弱くなり、水分は凍ってしまう。丁度地球の位置が、水は固体・液体・気体の3態をなし、液体の水は色々の物質を溶かす溶媒となり、生命誕生の必須の条件を備える。

次に惑星の質量が問題である。軽く、引力が小さければ気体を留めておけなくなり、水蒸気を含んだ大気は宇宙へ逃げていく。

更に、主星及び惑星誕生からの年数も重大問題である。生命が誕生するためには、惑星が安定した条件が揃わないと、例えば生命が誕生しても、長く生存し続けることができない。

主星からの距離・質量・年数等、多くの条件が揃つて初めて安定した生命の星が誕生する事に

なる。それゆえ、太陽系8個の惑星で、生命誕生が可能なのは、地球のみである。

そして太陽系円盤の外周は、軽い元素が主体のガス惑星であり、地球のような生命誕生に適する多様な元素が存在しない。あっても少ない。地球こそ生命誕生に最も適した奇跡の惑星である。

*

さてそれでは、地球によく似た生命誕生に適した太陽系外の惑星は、いかほど存在するのであるか？ 全ての恒星系に奇跡の惑星は存在するのであるか？ 科学者の推計によれば、我が銀河系には2000億個の恒星が存在するが、地球並の生命誕生に必要な条件の揃った惑星は、少なくとも100万個は存在するという。

我が銀河系に生命誕生に適した惑星が100万個も存在するのなら、地球の生命誕生よりも、1億年や10億年も先行した惑星があつて当然。地球より、百万年や1千万年先行する文明が存在してもおかしくはないはず。当然、地球などよりも、はるかに文明の栄えた生物が存在する可能性もある。

更にこの宇宙には銀河系が1600億個存在するから、全宇宙には地球以上の文明が栄えた星は数えきれないほど存在するはずとの事。とするならば、先進文明を持つ宇宙人が、数百万年前にこの地球にやってきて、地球生命の遺伝子操作を行い、「いたざら」をしていてもおかしくはない話。彼等はそつと呟く。どうやら地球というこの星は、人類とやらが主導権を握りそうである。ならば、この生き物の遺伝子を改変し（例えば利己的な遺伝子の活性化）、戦争好きで、我慾が強く、弱肉強食のろくでなしに発展するよう、温和な遺伝子の活

性を抑制し、戦争ばかりやって自滅するよう、いたざらをしておく。人類とやらがこの惑星を不毛の地に荒廃させ、更地になったら、先進文明の我々が簡単にこの星に移住できるよう、予備地として操作しておこう。気が向いたら再びやってこよう。いたざらをした後、彼等はマツハ100(秒速³³km)の超高速ロケットで自らは凍結睡眠に切り替え、自動操縦で母星に帰って行った。

マツハ100でさえ光速の一万分の1の速さにはかならない。太陽に最も近い恒星でも数光年の距離である。太陽系を脱出するだけでも半径1・6光年の距離を抜けなければならない。現実論として、いかほど文明が栄えた惑星があつたにしても、他の恒星の惑星にまで遠征できる船団を組むことは、おとぎ話に類する話である。UFOを見たりなど作り話は多々あるが、SFの世界に夢を膨らますのもまた楽しいものである。

それゆえ、宇宙人が地球人の遺伝子改変をやらしたとでも考えなければ、今日の人類のように戦争ばかりやって幼稚な文明を築く「愚」を繰り返すわけがない…と考えてしまふ。

人類は700万年かけて脳味噌を3倍膨らました。その結果が俺さえ良ければそれでよい…という利己的遺伝子の活躍する文明を生み出した。綺麗は健康に良いと企業が宣伝し、庶民はそれを信じ、洗剤や抗菌剤などで固めた生活に埋没し、ひ弱な抵抗力のない新人類を生み出した。特に雄のひ弱さが強力に進んでいる。

Y染色体はX染色体の10分の1であり、ポロポロに崩れ去る寸前である。オスのいなくなる世界。雌性生殖という繁殖手段を獲得しない限り、地球上から人類という生物は消え去る。現在の人類の

雄は、そのひ弱さを否定しようとするのか、空威張り、戦争の止む時がない。

この地球上で人類のみが、愚かな進化を続行中である。他の動物を見ればこんな愚かな行動をする動物は他にいない。食糧があるが無かるうが異常繁殖を繰り返し、ちよつとした便利のために、機械文明が、環境を荒らしまくる。愚劣極まりない生物集団である。

*

命の故郷「海」。母なる「海」。その海を愚かな文明が汚染・破壊していく。過剰な人間活動が温暖化を招く。集中豪雨や砂漠化を自ら招いている。とめどもない欲望が資源を枯渇させ、絶滅危惧種を増やしていく。特に我々脊椎動物は、これまでに進化する9割以上の時間を海で過ごした。それなのに第6の大量絶滅の危機を、人類はこの手で進行中である。海を讃える詩歌は多いが、それだけ海は神秘的で、そのもたらす恩恵は深い。

振り返ってみれば、滅亡していった古代都市は幾多も存在する。その理由はいろいろあるが、その一つは、人口増加で農牧地造成や、住宅建築・燃料にする為、森林は伐採された。雨が降っても保水力がないため、水源が涸れる。加えて気候変動で大干ばつが拍車をかける。今でも砂漠化の進行は止まらない。悉く水不足が、繁栄した文明を滅ぼしていく。私に言わせれば、異常繁殖をコントロールできない人類の無能さが招いた結末だ。

あれだけ巨大な津波の襲来は、無定見な人類への「情け深い神の警告」とも受け取れる。人類は、有頂天にならず、猛省の上、この世に生を受けた意義を慎ましく考えるべきである。

かすみがうら市出島地区(4)

○志戸崎地区

かすみがうら市の旧出島地区の先端を回って見ましたが、土浦の方から牛渡(うしわた)地区を通って町名としては「坂」という地名が歩崎の公園の方まで続く。この少し先に行くと坂という地名の中に昔からの「志戸崎」という地名も住所表記に登録されている。霞ヶ浦の漁として最も盛んなところでもある「志戸崎漁港」の名前を一部残したようだ。

歩崎の水族館のある公園に車を停めて歩いて志戸崎漁港に行ってみた。歩いてすぐであるが、湖岸工事をしていて県道の方を回っていった。

船のプールには10艘ほどの船が止まっていた。船には小さなエンジンが搭載されていて、それぞれ持ち主の名前が船体の横に書かれている。ここからすぐ先に沖生け簀(いけす)がある。これは鯉の養殖用だ。鯉ヘルペスで5年ほど完全に養殖ができなかったが、今は復活している。また陸側の生け簀(陸いけす)もある。水を大量に流し、酸素ポンベで酸素を送り、餌を上タンクから供給している。何が飼われているか見えなかったが、これはこの霞ヶ浦名産の甘露煮や佃煮などに加工されて出荷される。街の通りに出ると「貝塚忠三郎商店」の案内板があった。この路地を入ったところに1910年(明治43年)創業の老舗「貝塚忠三郎」商店さんの本店があった。屋号として「△」のマークを使用している。現在の社長で3代目だそう。ただし、現在この店舗では販売をしていない。

かすみがうら市の資料館(お城の形)のすぐ前に綺麗なガーデンと直売所がオープンしたためだ。庭園にはバラ等が栽培されている。

志戸崎地区の街並みを少し紹介しよう。街中を通る湖岸沿いの県道は今春バイパスができて、この街中や歩崎公園前を通らずに霞ヶ浦大橋の方に行くことができるようになりました。

これは便利ではありますが、街中の景色が徐々に無くなっていくようであり寂しい気もします。元々漁港以外にはこれといったところでもないのが気になります。

これはわが街も同じ。現在6号のバイパス工事をしていきますので、そのうちにレストランが連なっている通りが寂れてしまわないかととても心配です。「大國屋商店」さんの大きな古い建物がありました。

お店の中には生活雑貨類が置かれています。雑貨屋さんでしょうか。店の前に年季の入った灯油などの給油機があります。どうやら雑貨よりも燃料を街の家々や船などに卸しているのではないかと思います。店の入口に掲げられている額には「液化石油ガス販売事業者証」がありました。横から見ると土蔵・石蔵の造りと同じようです。この大國屋さんの隣はものすごく大きな屋根の家です。

昔は藁葺きの家の作りをそのまま瓦屋根にしたのでしょうか。このお宅は商売をされていないように見えますが、「タバコ屋」とさんど地図にはあります。「たばこは町内でかきましょう」とあります。しかし合併前の「霞ヶ浦町」です。霞ヶ浦町はその前は「出島村」でした。土地柄のイメージはやはり出島が合います。すぐ通りの反対側(山側)に「慈眼寺」という寺があった。

境内には石像や五輪塔などが無造作に置かれている。いつ頃の時代のものだろうか。五輪塔は江戸時代にも造られていたようだが室町時代まで遡るものかもしれない。

さて、この慈眼寺についてよくわからないので調べていたらとても面白い記事を見つけた。

「天保の坂村大騒動」というもので、天保五年(1834)にここ坂村志戸崎を中心にして起きた農民の決起騒動だ。

志筑(しづく)村で安永七年(1798)に起こった助六一揆と同じようですが、志筑では義人福田助六がまつられているのに対し、こちらは細野再兵衛(ぜんべい)という人物です。常陽新聞社が昭和42年に連載で書いているようなので、あまり詳しく紹介するのは省略するが、原因は坂村の名主が土浦藩の代官と密約して(悪代官と名主がグルになって)不当な年貢米を課したため、当時の志戸崎の貝塚恒助がリーダーとなってこの「慈眼寺」などに農民が集まって話し合い、隣り村深谷で人望の厚い「細野再兵衛」に頼み込んだ。しかし証拠がなく、何とか証拠を探そうとするうちに恒助は代官にみつきりつかまってしまった。

騒動が大きくなってきたのを見た細野再兵衛は農民の味方をして代官を縛り上げてしまった。再兵衛は私財をなげうって土地を開墾したりしていたため、土屋の殿様から土浦領の東郷(土浦から東側)一帯の名主総代に選ばれてもいたようで、体も大きくなかなか押し強い人物だったらしいが、ここは土浦藩に背いたとみなされて、入牢となっていました。

そして翌年牢屋で病気で死亡したとされている。まあ72歳ということですから牢屋は応えたので

しよう。また首謀者であった貝塚恒助は25歳の若さであったが打ち首になったそうです。

そして恒助の墓は「長福寺」にあり、再兵衛の墓は深谷にあるそうです。この長福寺も通りにから離れてはいますが、なかなか興味深い場所にあるので今度一度行ってみたいと思います。

○穴倉平・福蔵寺

霞ヶ浦の西側は二つの入江が伸びており、ひとつは土浦市と接しており、もう一つは石岡市に接している。この二つの入江に挟まれて霞ヶ浦に飛び出した地域を出島といった。

名前のとおり霞ヶ浦に出張った島のような形だが決して大昔を除けば、昔海だったり浮島のよくな場所ではなく、昔から陸地であった。

明治の初め頃までは霞ヶ浦の水運で結構盛んな時期もあったが、鉄道や車社会になると人の行き来が減り、取り残されたような場所となった。バスも神立駅から一日数本しか出ていない。

しかし、この出島の先端から対岸の行方市に「かすみがうら大橋」ができ、土浦からの道路の整備も進んで一部ではあるが徐々に賑わいも取り戻しかけてもいる。しかし、訪れてみてやはり地元に住む人以外の人が行くには、まだまだ交通も不便であり、魅力的なものも少ないとも感じる。訪れてみると、何もないと思っていたところが、意外なお宝が眠っていたように思う。柳田国男が「遠野物語」を書いて、一躍遠野地方が脚光を浴びたわけだが、この場所もそんな宝はいくらでもありそうだ。

私が、この地のことを取り上げるのについて、石岡の人たちにはきつと「つまらないところとを

とりあげたもんだ」と切り捨てられるかもしれない。しかし、古東海道終点の都市「石岡」常陸府中」のことを言えば、この場所を昔は通って都と行き来をしていた時代があるはずだと思う。

柳田国男は12歳からの少年時代にこの「古東海道」の通っていたと思われる利根川町(旧布川村)に住んでいた。何か感じるものがあつたのかもしれない。

さて、今回も偶然見つけた気になる場所の紹介です。

前に穴倉城本丸跡を紹介しました。この穴倉城も比較的大きな城で、この辺り一帯を城郭の一部として管理していたようです。そのため、戦国末期までの中世の信仰・思想などを知る古いものが残っているように思います。この県道108号線を出島の先端に向かって走っていた時に見つけた「福蔵寺」を紹介します。

街道を穴倉の街並を抜けて一旦下がってまた登ったところが「安食(あんじき)」という少し変わった地名のところに出る。

この入口のところが「平」という場所で、この通り沿いに畑の中に置かれたようなお堂が1つ建っていた。このお堂が「福蔵寺」という真言宗の寺だそうです。現在は無住で、石岡市井関にある「盛賢寺」という水戸藩に擁護された比較的大きな真言宗豊山派の寺が管理をしている。通りからすぐ石段があつて、お堂(寺というらしい)は門も扉もありません。

寺の額にはほとんど読めなくなったような薄い字で「樹栄山福蔵寺」と書かれています。

ネットで調べると「寿栄山福蔵寺」となっています。漢字が違うということはそれだけ歴史があ

るのかもしれない。

この上りの石段の横に面白いものが置かれました。「四十七番八坂寺写」「廿九番赤亀山写」などと書かれています。これは四国八十八ヶ所霊場の寺や山号です。それに一つずつ仏像が掘られています。多分四国の霊場でそのご本尊である阿弥陀如来や薬師如来の像を写したのもかもしれません。

中世に铸件で像を作ることが流行り、像の铸件がたくさん作られました。この铸件を持ち帰り、寺に安置したものは「百観音」などといわれ、対象は秩父・坂東・西国でした。

ギター文化館

2015 CONCERT SERIES

- 7月 5日(日) 莊村清志 ギターリサイタル
- 8月 9日(日) 里山と風のコンサート ギター・亀岡三典
朗読・しらいひろぢ
- 9月 5日(土) 福田進一 ギターリサイタル
- 10月 4日(日) 河野智美 ギターリサイタル
- 10月 18日(日) 村治奏一 ギターリサイタル
- 10月 15日(日) 朴葵姫 ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

このような四国霊場の像が信仰されて置かれているのは何があったのでしょうか。

泉鏡花の「高野聖」という少し艶かしい小説があります。高野山の下層の僧侶が全国に勧進という募金を集めて回っていたのです。

この福蔵寺には毎年1月17日にお寺にある「大般若経」を持って各家庭を周り、お札を配るそうです。そしてその時にお札にお米を奉納したそうです。今はお米ではなく現金になったようです。この石像群の中に少し変わった文字が彫られている石柱が置かれていました。

なんと書かれているかよくわかりませんが「盗人」などという文字も見られます。なんとなく気になったので紹介しておきます。

このお寺はまわりが囲われていません。すぐ裏は果樹畑です。周りの林の方からは盛んにウグイスの鳴き声が聞こえていました。

○空也堂

昔は旅すればどんなところにも必ず「道祖神」や「二十三夜塔」などがあったのだろう。

芭蕉が奥の細道に出発したのは元禄2年3月27日となっているが、今の暦では5月の中旬だそうだ。出立するときに読んだ歌は

「行く春や 鳥啼(なき) 魚の目は泪」

である。鳥も魚も行く春を惜しんで泣いているように感じたのだろう。

この序文は有名な「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。・・・」で始まるが、このしばらくあとに「白川の関越えんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取る物手につかず・・・」という記述があ

る。あちこち歩いて旅して、道端にある道祖神に心を慰められたことが思い出され、東北の道端の神様に会いたくなったのだろう。どうも年取るとこんな道祖神に会うと、またどこか出会いたくなるものなんですね。

先に四国八十八霊場に関連した像が置かれていた「福蔵寺」を紹介したが、地図でみるとこの近くに面白そうところが載っていました。

もちろんもつと大きな寺や由緒のある神社はあるのですが、あまり人が訪れることもない神社やお堂にこそ、この地に残って続けている信仰や風習のかがりがしてきます。少しだけ覗いてみましょう。まずは安食より少し手前の宍倉堂山の菱木川に近い台地にある「空也堂」です。地図には名前が載っていましたが、現地には何の案内板もありません。

県道から入った横道から更に横に入る道があります。通りの左側は菱木川です。

少しこの道を行くとすぐ上に登る石段があります。お堂が見えます。空也というから空也上人を祭っているのでしょうか。

登りの石段の途中に「四国?場中御本尊石仏供養塔」なるものが置かれています。これも四国の弘法大師(空海)の密教・高野山信仰など何か関わりがありそうです。

さて、ここも調べていたらとても面白そうところですよ。京都の六波羅密寺と福島県八葉寺と並んで「日本三空也」の一つだということです。

このお堂は2006年に建て替えられたものだと思います。見た目にはなんにもなさそうではあるのにこの地はとても変わっています。

この宍倉城の城主「菅谷氏」の時代から浄土教

信仰がとても盛んなところだったそうです。

「常陽リビング」に詳しく載っていました(住民のどし潤した空也上人のお堂。それにしても鹿蔵から宍倉になったとか、「北毛(ほっけ)の清水」とか面白い話が盛り沢山載っています。また、菅谷氏との関係があるということで戦国時代に高野山信仰があったという記事も見つけました。興味が湧きま

○堂山千手観音堂

「空也堂」というところを紹介しましたが、こういうところはなんといいのかわかりませんが、中世から江戸時代と続いてここに何か地元だけで伝えられてきたように思います。

特別の神社として信仰が広まっているものではないですね。

この空也堂のすぐ近くに「堂山千手観音堂」と地図に書かれている場所があります。通りからほんの少し入ったところにありました。

一般の農家の建物か、地域の公民館かなんかのようになっているように思っていました。でも入口に説明板が置かれていたので気がついたわけです。

これによると、室町時代に製作されたと推定される三方開きの「厨子(ずし)」が保存されているそうです。しかし、その中であつたであろう阿弥陀如来像は行方不明です。

でも金箔で描かれた菩薩像も迫力ありますね。室町時代から受け継がれてきたのでしょうか。

境内には沢山の石像が置かれていました。みな道祖神として道端に置かれていたものかもしれません。二人むつまい姿を彫られているのは道祖神ですね。猿田彦と天宇受売(アメノウズメ)を表し

ているとも言われます。

さて地図ではこの千手観音堂の裏手に「飯縄神社」という神社が載せられています。

裏へ回ってみると道は続いているが、竹林となり、歩くところだけ切り開かれていた。そしてその中に鳥居がひとつ。

鳥居の周りは木を切り開いていてポツカリと日があたって明るくなっています。

鳥居の先に神社の祠がありません。置かれているのは2体のご本尊だけ。

周辺にはこのような石像が守るように置かれています。

いつかこの記事を見て何かを感じてくれる人が現れるかもしれません。

(記事は2012年4月に書いたものです)

高浜河岸から境堂へ

伊東弓子

今回の取り組みで又新たな発見もあったが、地元の話をしてもらう為、随分足も運んだ。めぼしい七人八人を尋ねたが、難しく考えたのか、理解されなかったのか、断られた。久しぶりに立ち寄った所で請け負ってくれる人が見つかった。

山王川公害事件は日本の公害問題の口火を切った事件だった。その問題に取り組み活動してきた赤津さんだった。問い合わせも多かったが、高浜城に対しての指摘もあった。東田中の高野浜城の事ではないかと言う。そして石岡の町の事、地域興しの事など話した。私の勘違いからきた間違いだったと礼を言って参加をたのんだ。

「総会など」という声もあったが、多少なりともお金を預かっている以上行うことも当然かと思う。高浜の町は夫の勤めていた会社との繋がりの方が多く、夫の思い出話をしてくれる人がいた。また引越してきたばかりの人も次回には是非行きたいと言ってくれていた。

高浜町には私の子供の頃の姿がある。川島医院に、担当の石田先生の所に、八戸に行く最終列車に乗る為歩いている私の家族の姿がある。学生時には朝夕通って知る人が増え楽しかった。

その頃の町の風景は沢山の職種の人が家を並べ、人の出入りが多かったことだ。大きな屋敷もあったが、看板をもつ家が多かった。そういう店を綴り出したら原稿用紙二枚位になりそうなので省く。

若かったせいか「舟と女は新造にかぎる」という波打ち際に建っている看板には「変なの」と思っただものだ。

いずみ荘の反対側に大谷石を積んで一段小高い空き地がある。そこまで水が来ていて舟が着いた所だという。

住居と水辺の境もなく狭い所迄田があり、増水すると川の一部となる。昭和三十年代に入った当時、自転車で水の中を走ったり、遠回りして商店街を通った事もたびたびある。妹が高浜に嫁いでは、自分の住む地域の一部のように大きな顔をしてこの町を出入りしている私がいる。

資料の一枚「高浜河岸」の賑わい図は、公民館の出入口の所に立札としてある。これは高浜神社の江間からの物である事、目の前の高浜舟溜りの水神様は川の中州にあったものだと、広伝、篠目河岸、歯医者、工芸物産と私の拙い説明で出発した。

高浜神社での赤津さんの説明がよかった。古代の高浜と大和との交流がこの流れ海を往き来した人や物の力で歴史・文化が造り上げられて来た事を改めて深く知った。今建物や地名や古墳にその姿を残している。その一つ一つに目を置く事でこの地域をより深く知ることが出来るだろう。九十才の人が修学旅行に鹿島様に行ったが、帰りは大風雨で帰れず何泊かしたそうだ。荒々しい流れ海を時間をかけて交流が進んだ事を思う。今のようになどいかなかった事だもの練に練ったものが造られたのだろう、と歩きながら考えた。

後始末した会計の人達と愛郷橋辺りで合流した。歩道が出来上っていないので少し遠回りをして、高浜の人達が呼ぶ「きよし桜」の堤へと進んだ。

堤防を進むにつれ視界は広くなった。嘗ては龍神山の中腹までも水面があったと聞くが本当に広大な海があり、今迄に長い時間が流れたことを感じる。

桜堤から町を眺めると、縄文人が花や紅葉を愛で、水運で賑わい大儲けした人達の喜びの声も時代の一ページを作ってきたのかと、寺や社の多いのもこの町を守ってきた証しかと考えてみたりする。爪書阿弥陀さまを彫った上人や近代の世を開こうとした天狗党の人、初代県知事になった人の足跡も通り過ぎた道が、今に続いている。

終戦後、小林巢居人先生の一家もこの地に住んだ。苦しい生活の中で温かいこの地の人に支えられての暮らしから生まれたペンの動きが沢山の線の一本一本が後世の作品へと繋がっていったと聞いた。恒缶先生も一日一日の積み重ねの生活の中から、水辺の作品を描かれている。大地も空も水辺も、水の中までもが美しい時代の姿をたつぷりと、

一つ一つの画面に描かれている。現在はもう見る事の出来ない美しさ、それは先生の絵の中に残され、現代への警鐘を鳴らしている。

山王川河口が見えた。葦が豊かに茂っているが、出発前に聞いたアルコール工場からのアルコールや他の成分の流出による公害を受けた東田中の農業をしていた人達、霞ヶ浦で魚が浮いて死んだという事件を改めて思い出した。豊富な知識と活動力をもつ、赤津さんの話しはみんなで勉強したいし、公害第一号の運動の結果の碑を建てたいという願いに協力したい。

今の恋瀬川が霞ヶ浦に出る所の様子は一段と変わる。学芸員がこの雄大な自然と長い歴史を話してくれた。声をかけ集合してもらった。縄文の森、海水淡水の豊かな漁場、地元人と大和人の勢力争い。古墳時代から律令国家への変遷。戦国時代を過ぎ水戸藩の支配下に置かれた霞ヶ浦周辺と歴史が目の前に姿を表す。北に高野浜城、東に富士峰館、西に三村城、南の出島台に、玉里台の高崎館、その先愛宕館とお互いに権勢を誇っていた事だろう。古く古墳群を造った勢力も然りであろう。

干拓の突端に恋瀬川の河口があり、現在の消防署から略、葦原の中を直線で流れていたらしい。その出口辺りに大川崎(絵図の①)漁場があった筈だ。今は水門がある辺りかと思われる。陽射しが強く、長く歩き続けたことも疲れを一層増して前後で大分離れ、幾つかの固まりが出来た。つい先達で二つの峰の間に夕日が沈む「ダイヤモンド筑波」と言って、大発見したかのように人が集まっていたという。土地の人からいうと「そんなとってつけたような言葉を使って騒がなくても、昔から眺め、皆で感動してたよ」とのこと。その美し

さは辛い生活の中で、乗り越えていく力の一つとなってきたのだろうと思う。その人は続けて「兎に角、塵なんか投げていかないでほしいよ」と言っ

て事を思い出した。導水事業の広い土地が干拓の一部を埋めつくした場所に差し掛かった。もう十年以上も前になるか、冬の夕方時この辺りを燃やしている年配の人に合った。「ここに自分達の屋敷があった。後片付もこれで終わりだ」と言う。太い丸太も砕かれて赤色から白色に：そして灰色っぽく変わっていった。とても温かかった。「頑張ったが百姓もこれで終りだ。随分頑張ったつもりだが、力関係と金の力には勝てなかった。皆賛成していったもんな」と団結の崩れと、金の魅力に負けたことを悔しがつていた事を聞きながら、時代が押し潰していく力を思うだけだった。

わし塚、うなぎ塚が見えにくく、説明を確り出来なかった。

境堂舟溜まりから羽成子の方へ流れる新川が姿を変えようとしていた。一部を埋めたて車が入れるようになっていた。木の橋は使用禁止の綱が張ってある。柳や葦は生い茂り、心配なかった。

三村、石川の水神さまを左右に見て、境堂の木陰で一息ついた。「ああ！ここが御留川」の境の目印とした所かと、当時決めた役人の姿などを浮かべてみた。人家は、浜辺は、このお堂や漁民の一人にでも合いたい気持ちだった。傍の小高い山に池上先生と梅沢さんも登ってみたいという。私は今回対岸の銚の宮方面に赤い風船を建て「御留川」の境を知らせたい願いが達成出来なかった無念で座り込んでいただけだった。

皆急に急ぎ足になった。新川を渡り干拓内の畔

を歩いた。足には優しい畔道だった。今までになく纏まりがないように思えた。平坦で広い所では個々がゆっくり歩みを進める事は不安な心理が働くからかな、お腹も空いたせいかも知れない。

先に行く人に「干拓の碑を見てくださいよ」と大声をかける始末だった。歩道と車道を笑いをとばしながら高浜ハイウェイに入った。いづみ荘の駐車場では蜘蛛の子が散るように分かれていった。昼食は「行方の風土記を歩く会」の人も加わって、一まわり大きい活動の仲間を知る機会になった。赤津さんの参加、協力も行方の人達との出合も私達「御留川を歩く会」に勇氣や力をもたらしてくれた。

始めから終わりまで「いづみ荘」のみなさんの好意にあまえさせて貰いながら、三代目のおかみさんから割烹屋いづみ荘の成り立ちから現在のご苦労など、話しをいただく機会をもたなかった失礼をお詫びしたい思いだ。

漁の事は高浜漁業組合最後のメンバーがいるにも拘らず、その人、小池氏に交渉する事を怠ったことは取り返しがつかないと参加した人達にお詫びしたい二つめだ。三つめのお詫びは資料の作り方が実にお粗末だった事だ。コピーの濃淡、重なり合う部分が見えなくなる所が多い：等一夜漬けとこのことだと恥ずかしくなった。

今日のメインの小漁場の説明も最初に行っていたが、でも、高浜公民館という場所を使わせていただき、高浜がより身近になった。

最期に私の脳もまだ正常に近いと感じた事が今回の大きな収穫だった。資料に「高浜城」と記したのは「高浜館」の事だった。六十年前、豊崎卓先生、中島實先生から聞いた話しの中に記憶して

いた事だった。ただ指摘された時にきちんと説明出来なかつた事は、多少脳も疲れている事は事実だと自分に言い聞かせて閉じる歩く会だった。

「さあ、風の会への展示の準備をしなくては」

海軍百里航空隊 百里神社 小林幸枝

小美玉市歴史。パンフレットに出ていた百里神社の案内を見て、急に行ってみたくなり、出かけてきました。

茨城県小美玉市にある現在の自衛隊百里基地は、戦前海原の百里原海軍航空隊があつた所です。百里神社は、その当時の営門の近くの林の中にあると紹介されていましたが、その場所がなかなか分かりませんでした。

案内標識もなく、近くを何度も行ったり来たりして、林と竹藪の中によく参道らしきものを見つけました。藪を透かしてみると、鳥居と神社らしきものが見えました。参道は伸び放題の雑草と竹藪で荒れ放題でした。

入口付近の樹木の間に挟まれるようにして百里神社の石碑が置いてありました。石碑には、昭和二十年八月十五日を記念して建てられたとありました。

蜘蛛の巣と藪蚊に襲われながら少し行くと、コンクリート製の鳥居が見つかりました。鳥居は飛行機のタイヤをイメージした、独特の形をしていました。それを過ぎて進むとコンクリートの箱のような形をした神社がありました。神社には、鉄の扉が填つていて南京錠がかけられていました。

神社の近くにはコンクリート製の四角い建物があり、信号を送る指令室と言われているようですが、実際には何の建物だったかは分かりません。

初めて行ってみましたが、不気味な感じがするだけで、神社と言う感じのしないものでした。戦争の悲惨さだけが思わせられる建物でした。

興味を持っていかれる方は、長袖に虫よけスプレー、そして蜘蛛の巣をはらうつえのようなものを持つていかれるといいでしょう。またサンダルのような履物ではないかと思います。

県指定文化財(4)

兼平智恵子

市民の皆様には地域への関心を持ってもらうことを主眼としてスタートしました石岡市立ふるさと歴史館は四カ月目に入りました。皆様の関心が確実に盛り上がっていることが感じられます。

四・五月は解体修理の説明を中心として行われた「石岡の陣屋門」展には、それぞれの陣屋門についての懐かしい想い出話しや以前の陣屋門とすつかり変わってしまった価値が下がってしまうのではとご不満のお言葉もありました。

現在、七月いっぱい「左官・土屋辰之助と石岡の看板建築」が行われています。千葉県神崎出身の土屋(養子)に入つてこの姓になりました辰之助が大正の中頃、石岡に移り住み、現在石岡の看板建築として人気のある建物を手がけ、商店主ともどもオリジナルの「近代的町並みづくり」に寄与したと言える「左官・土屋辰之助」について、どうぞ歴史館をお尋ねになりまして、ご理解の上改め

て中町通りの看板建築の素晴らしさをご覧になってみてください。

本題に入ります、今回も県指定文化財三件をご紹介します。

○一遍上人名号

有形(書跡)

指定 昭和三九・七・三一

所在地は国府三丁目一番一三号、踊念仏(太鼓や鉦を打ち念仏等を高唱する)で有名な開祖、一遍上人が書いた掛け軸で「南無阿弥陀仏」と書かれています。

一遍上人は鎌倉中期(一二三九～二八九)の僧で時宗の開祖。伊予国(愛媛県)の豪族河野七郎道広と母北条氏の間生まれ。七歳にして延暦寺で天台宗を学び大宰府で法然の孫弟子で西山派の聖達を師とする。熊野本宮に参籠して靈験を得、名を一遍と号し、諸国を遊行(遊行上人とも言われた)し、踊念仏を広め、多くの庶民をはじめ公家武士にあげられる。相模国の藤沢には清浄光寺を創り出した。

正応二年(二八九)八月二三日に摂津国(大阪府と兵庫県の一部)八郡兵庫津の西山山真光寺で亡くなる。

旧石岡市街地、寿金丸通りの華園寺が時宗で知られています。

○蒔絵提筆筒

有形(工芸品)

指定 昭和四四・一一・一

所在地国府六丁目四番二号、長方形で前は片開き扉で鍍金金具がつけてある。黒漆地に梅の文様が描かれ、梅は金蒔絵で、枝の中の数条に螺鈿を施す見事なものです。桃山時代(二六世紀後半、豊臣秀

吉が政権を握っていた二〇年間)の影響を受けたもので県内では珍しいものです。

○芹沢文書一括 有形(書跡)

指定 昭和四四・三・二九

芹沢文書は、芹沢家に伝わる室町時代応永年間(一三九四～一四二七)から江戸時代初期にかけての七十数点に渡る文書です。其の中には写と判断出来るものも若干ありますが、茨城県内をみても中世の文書をこれだけ、個人が所蔵している例は少なく大変貴重である。これらの文書は大部分が芹沢家にあてられた書状で、応永年間の足利持氏の書状ほか、芹沢氏が医薬に携わったことを示すものが多いことです。例えば、古河公方足利成氏らに念頭の祝儀として「万病円」「白薬」「長命丸」などの薬を贈ったことに対する返書や、常陸の各地から治療におとづれたことを示す書状等々、地方には珍しい文書です。所在地は国府六丁目四番二号となっています。

芹沢家は常陸大掾氏の支族で芹沢城主(新撰組・筆頭局長・芹沢嶋の先祖)の居城でした。佐竹氏の「南方三十三館攻め」でこの地を追われましたが、徳川政権に復権。水戸藩の上席郷土となりました。代々医者の家系で母屋は昭和初期の建物ですが現在は空き家(行方氏芹沢「旧玉造町」となっていて、ご子孫は石岡で医院を開業なさっています)。
蒔絵提筆筒と共に芹沢文書は茨城県立歴史館
お預かりになっております。

(参考資料・石岡市の文化財 石岡市教育委員会)

・乱舞いの水芭蕉 勢揃いの白樺

六・一四 尾瀬にて 智恵子

【風の談話室】

関東地方の梅雨明けの平均的な月日は、7月20日頃だという。

沖縄では梅雨が明けたと言いが、九州地方には梅雨とは言えない豪雨が降り続けている。

五月に猛暑の夏が早々とやって来たが、今日のこの地は冷え冷えとした風が雨を抜けて吹いている。梅雨が抜けた夏は、信じられないような酷暑の夏がやって来るのだろうか。インドでは50℃に達するような酷暑があったという。

恐ろしくなってくる。我が家の今年の梅雨の花の紫陽花は五月の酷暑の所為か、小ぶりで色づきが良くない。何かの予兆でなければ良いのだが。

《読者投稿》

養生日記(詩二編)

堀江実穂

差別

どうしても人を差別し

どうしても人と比べたがる

障害者と健常者との壁

障害者の友が言う

ニコニコの笑顔で

私健常者と結婚するの

その言葉に心が痛む

私は健常者と結婚した

その時私は健常者だった

そして障害が発生して離婚した

・母親が障害者だと子供がいじめられる、と

・障害者の母親がいると子供の結婚が、と

他人の声、他人の声：：：：

健常者、障害者と言う前に一人の人間がいる

障害者の自分は存在を許されないのでか

一生懸命生きている

それでも障害者は邪魔にされる

白い目で見られてしまう

心が泣いて俯いている隙に

白い視線が頭上を走って行く

心が泣いている

鏡が泣いている

私の心を鏡にのぞくと

不安に怯えている私がいる

お前は子供を捨てた

子供を置き去りにした

鏡の自分の背後から

無責任な他人の言葉があびせられる

無表情にしている私の顔から涙が流れている

鏡の中の自分が泣いている

私が泣いているのではなく鏡が泣いている

どんよりとした重い気持ちに

押し潰されそうになる

近所から聞えてくる赤子の泣き声

道にすれ違う小学生の笑顔

おしゃべりに夢中な中学生

スパーに行くときと澁刺と働くバイトの高校生

それらを見てみると自分の子供達を思い出す

鏡に自分を映すと無表情の顔に涙があった

鏡よ泣くな、私は涙なんか流していない

《ことば座だより》

「緋桜怨節」演出余話

白井啓治

第28回ことば座定期公演も無事終えることが出来た。昨年に続き今回の公演でも、札幌の「つぶぎびと」から熊谷敬子さんが応援に来てくれ、常世の国の恋物語百に詠んだ舞歌から「鳴滝」を二人で朗読させてもらった。

ふるさと風の会に半年遅れで創設したことば座であるが、演技部は相変わらず朗読の小生と手話舞の小林幸枝の二人なので、男女の朗読も一人で行なっており、今回初めて男女での朗読をさせて貰った。

風の会同様何とか人材の育成をと思っているが、なかなか思うように進まない。門戸は大きく開けているのではあるが。

さて今回の朗読手話舞劇は、三度目の改訂版による公演であった。小林幸枝の手話独り劇の形式は変わらないが、物語の発端になる導入部分を大きく削除し、それに代えて謡曲風語りでの手話舞を加えた構成にした。

この物語は、菖蒲沢の薬師堂に登る道を「薬師古道」として新しく広い道にした事で、その環境を変えてしまった歴史・文化の保全に対する意識、認識の貧しさを嘆いて、創作したものであった。

前提条件となる前段を切り落とすことに些かの躊躇いもあったが、常世の国の恋物語としては、へー、菖蒲沢の薬師堂にはそんな秘話もあったのだ、で良いだろうと思いついて落としてみた。

その辺の事情について公演のプログラムに紹介したので、それをもう一度ここに紹介したいと思う。

(公演プログラムから緋桜怨節演出余話)

物語創作への経緯

石岡市菖蒲沢に高さ約2メートル半の薬師像を祀った古いお堂がある。お堂までの山道には馬磨神、二十三夜供養碑、氏神様、不動尊、天白稻荷神社などがありいかにも信仰の山といった感じのする、そのまま手付かずに残しておきたい所であった。

ところが、この薬師堂に登る道を「菖蒲沢薬師古道」と名付けて新道を整備してしまった。国の予算を貰ったの整備なのだそうであるが、いわゆる昔からの道を古道と名付けて整備してしまうと、とんでもない新道になってしまうのだから不思議である。薬師様もさぞかし驚いておられるであろう。信仰の山には苦行してこそのご利益だろうと思うのだが、安楽に果してご利益があるのだろうか。

何と言っても霊山の古木を、殿の御成りの邪魔とばかりに打ち首にし、駕籠で登るような道にしてしまったのだから、お山の嘆きは大層なものだと思ふ。

この事を何か物語として残したいという事で思いついたのが、この緋桜怨節であるが、緋桜怨節の物語の由来について、前回までの脚本から抜粋し紹介する。

× × ×

以前に、山桜の頃この山道を訪ねた。古木の立ち並ぶ隙間から薬師堂とその下にある弁天池を望める高台に、道を塞ぐように立ちはだかりひとときわ赤い色をつけて咲く山桜の太い古木があった。

その赤く咲く山桜を見あげて

「ひっそりと薬師如来の座りおる山桜」

「山桜咲く枝の見あげて薬師如来の何を想う」

と一行の文を呟いたのであった。

しかし、その一行の呟きを詠わせてくれた山桜の太い古木は、国家予算のお通りの邪魔だとかかりに見事に打ち首を貰っていた。

その打ち首となった古木の切り株に腰を下して、頭上のすっきり開けてしまい、広々とある天空を些か呆れかえり、感傷の思いに見上げたとき足元から、

『お願いでござります。再びの命、お守りください』

という声が聞こえてきた。

腰掛けた股の間から足元を見ると、首を打たれた切り株から緑葉を付けた生まれたての小さな枝が揺れていた。

慌てて小枝を庇って足をずらしたところ、

『ありがとうございます。この生まれた双葉が無事に育ちますかは、天命でござりますが、天命と諦める前に枯れさせてしまいますのは、余りにも雪殿に申し訳ございません。もう間もなく雪殿からお預かりいたしましたものが、全て土に還ります。』

お預かり物がすべて土に還りますには、私の命ももう少し繋ぎとめておかなければなりません。そうしませんと、お預かりしたものが化石

となってしまい土に還ることは出来ません。私が首を打たれるとき、随分と大声を上げたつもりでしたが、誰一人気付けてくれたものが居りませんでした。生まれた双葉がこの夏をすくすくすることが出来たら、天命が与えられるでござりましょう』

という声が切り株の地面に這わせた根子のほうから聞こえてきたのであった。そして、双葉によって命をもう少し繋ぎかねばならない話を聞かせてくれたのだった。

× × ×

この切り落としした前段に変えて、今回の2015では、物語の全体を象徴する「手話舞」を加筆した。

手話舞の基になる朗読詩は、：

『かく狂じたる憂き身にも

知らぬ心のあさごろも

君が別れはいかなれば

君が別れはいかなれば

悲しみ暮れて涙なく

人目の分からぬわが姿

いつまで草のいつまでと

知らぬ心はあさごろも

桜の花の怨み節

『桜の花の怨み節』

この詩の朗読をバックに手話舞する内容は、

『こんなにも激しく恋に狂い、せつない思いをしてきた私ですが、胸の思いを衣で覆い隠したまま、お告げすることもなくお別れする事になってしまいました。』

あなたとの別れが、こんなにも辛いことだとは思ってもおりませんでした。

こんなにも辛すぎる事だとは…。

毎日泣き暮れて過ごし、今はもう涙も出なくなりました。

人さまから見れば、なんと見苦しい姿とお思いでしょうが、私は深草に埋もれていますから人目などは気になりません。

私の貴方への思いはもうお伝えできません。私の激しい思いは、この山桜を緋の色に染めてしまいました。

私を置き去りにして逝ってしまったわかれた、怨みの色に染まってしまいました』

…である。

さて、初演に書いた緋桜怨み節の物語は、首を打たれた山桜の古木が聞かせてくれた話として展開していくのであるが、実際に小生が腰かけた切り株は、山桜の古木ではなく檜の古木であった。

しかし、新古道を作るのに山桜は保存して檜は切り倒して良いという事ではない。古道として再生させるためには全きを保つての修復でなければ歴史的、文化的に意味はない。

また、怨み節の物語を想像させてくれたのは、昔、薬師堂の傍に庵があり、一人の尼さんが暮らしていたという話しを耳にしたことであつた。

ふるさと風の会の前身であるふるさとルネサンス塾で、塾生の皆さんには、「ふる里」の一つの定義として「ふる里とは、物語の降る里である」とお話しした。確かな暮らしのある里には、暮らしの色々な側面に説話だとか伝承民話として物語が語られてあるものだ。その物語は、暮らしの道標である。里に伝えられる物語が一つなくなれば、暮らしが一つなくなつたことを意味する、と。

里の暮らしが長く続けば、寿命が尽きて消滅していく物語も出てくる。しかし、新しく生れて来る物語も沢山ある。

命あるものには、時の移ろいの中にそれぞれ

の物語がある。それを囁くのはふるさとの風であり伝えるのもふるさとの風。

今回の公演で演じた桜の古木が囁いた風の物語は、古道と名付けられた新道が出来たことで吹いた風と、捉え理解していただければ、歴史・文化の保全とはどういう事なのかを考えてみるきっかけとなるのではないかと思つている。

《一寸一言・もう一言》

|| 一寸一言

十字軍が行く(一)

打田昇三

ノートルダム寺院などロマネスク様式とかゴシック建築とか呼ばれる大聖堂には意味が分からない怪物像が付けられている。是はキリスト教が思う様に普及しなかった中世に、ゲルマンなどの土俗信仰を取り入れて布教宣伝をした名残と考えられている。それぞれの地方には奇跡を顕したとする聖人が居て、其の名前を付けた教会が多いのも同じ理由からであろう。聖人崇拜熱が高まれば何か証拠物件が欲しくなるのが人情である。そこで「聖遺物」が尊重されるようになる。

かつて印度では涅槃に赴いた釈迦の遺体をヒンズー教の教義に則つて荼毘に付した。訃報を聞いてマガダ国王や有力諸部族の長たち、高名なバラモン(神官)、或いは故郷の人々など多数が火葬場に集まった。釈迦の遺骨こそ正に「聖なる遺物」であるから参集者の誰もが欲しがつた。有力者は是を独り占めしようと企む。

厳肅であるべき場所で遺骨の奪い合いから戦争が起こりそうになり、結局、インテリ階層らしいバラモン（馬鹿もんでは無い）の調停によって印度の八地域に遺骨を分けて祀った。これが仏舎利塔である。怖い話だが、火葬の風習が無かった中世ヨーロッパでは、弟子たちが寄つてたかつて聖者の遺体を切り刻み、是を分配して、御護りに持っていたと伝えられる。本当であろうか？

「聖人崇拜から聖遺物に執着し、其処から聖地への憧れ」という図式が出来上がったヨーロッパのキリスト教徒は、いつしか此処彼処の居住地から聖都エルサレムへの巡礼を試みるようになる。冷静に考えれば、千年もの歳月が経ち、支配民族が変遷して異宗教化（イスラム化）したエルサレムに初期キリスト教の聖遺物が残っている筈が無いのである。それでも「百聞は一見に如かず」：遙々と冒険旅行をした先駆者（先苦者と書くべきか？）が虚実取り混ぜて語る体験談が尤もらしく伝わって欧州全土が巡礼熱に浮かされ始めた。

抜け目の無い地元商人は巡礼者が欲しがると土産物を揃え、聖地と伝えられる場所を整備して郷土の観光協会に協力した。ところが、此の微妙な関係から成り立っていた「聖地巡礼産業」を根底から覆し歴史さえ変える事件が起こったのである。その原因をつくったのはセルジュークトルコである。現在のカザフスタン辺りに居た小さな遊牧部族であったが、親分筋に当るアッバース朝イスラム帝国（七五〇～一二五八）の衰退による支配の空洞化を利用してイラン、イラクを抑え一流の王朝に押し上がった。日本のような本家、分家制度を利用して勢力を伸ばし西暦一〇七一年頃には其の国土が巡礼産業の聖地・エルサレムに達し、

更には、ビザンチン（東ローマ）帝国が辛うじて保っていた現在のトルコを侵食した。

是により観光業者が痛手を受けたのもさることながら困ったのはビザンチン帝国である。燎原の火勢で進撃して来るイラン系イスラム軍に首都コンスタンチノーブルを包囲される日も遠くない。危機に直面した皇帝アレクシオス一世は、何とか安上がりに救援軍を呼ぶ手段として、十何年も前に決別したローマ教会にSOSの手紙を送った。

「：キリストの聖地エルサレムがトルコに奪われ、何よりも欧州各地からの巡礼者が迫害されている：」と書かれた手紙には、現在でも東方正教とカトリックに分かれていた両教会を一時的にでも協力させる効果がある。

一寸一言

菅原茂美

本年5月号で私は「反物質」という事をこの会報に書いたら、ある読者から反物質とは何か？と問われたので、その他と合わせ、お答えする。

●正物質と反物質は鏡像の関係で、質量など全く同じであるが、量子の帯びる電気が全く逆である。物質とは原子からなり、原子とはプラスの電気を帯びた陽子や中性子からなる「核子」の周りを、マイナスの電気を帯びた電子がぐるぐる回っている。ところが反物質とは核子の電気がマイナスで、電子はプラス（陽電子）であり、全く正反対である。正物質と反物質が衝突すれば瞬時にして両者は消滅し、エネルギーに変換される。宇宙誕生の初期には、正物質の量が反物質の量をわずかに上回ったために、両者は衝突して消滅しても正物

質が残りに、そして反物質の寿命が、わずかに正物質の寿命より短いために、現在見られる正物質のみが、この宇宙に存在するようになった。

●暗黒物質とは？ 光を出さずに質量のみを持つとされる仮設上の物質。銀河内や銀河間に大量に存在しながら、その正体は全く不明。例えば、遠くの銀河が歪んで見えるのは、その中間に巨大な質量を持つ物質が、その引力で、光を曲げている（重力レンズ効果）としか考えられない。

●暗黒エネルギーとは？ 宇宙全体に浸透し、「負の圧力」を持ち、実質的に「反発する重力」の効果及ぼしている仮想的エネルギーを言う。宇宙は現在、猛烈な勢いで拡張している。そのエネルギーは、現在の物理学の質量による引力などでは理解できないエネルギーによるものである。

また、円盤銀河の回転エネルギーも、銀河団を構成するエネルギーも、現代物理学では理解を超える莫大なエネルギーである。

もう一言

密議の果て

打田昇三

有名な川中島の合戦が行われた翌年ぐらいの話であるが、江戸城外の北西部に法恩寺という日蓮宗の寺があり、其処で太田道灌の曾孫に当たる太田新六郎康資が年末の先祖法要を行なった。此の寺は康資の父（資高）が建立したものである。

江戸城を築いたのは太田道灌であるが、主君の扇谷家・上杉定正が馬鹿で、無実の道灌を暗殺したため太田一族は城を失った。新六郎は小田原の北条氏重臣である江戸城主の遠山丹波守直景に仕

えて直景の娘を妻にし、江戸城の西郭責任者に任じられていたが、曾祖父が築いた江戸城が自分の城では無いことが不満だったのである。

法要の席に集まったのは康資と弟の源四郎、甥の源七郎、それに家臣が二十人ほどであった。此の寺には小堂が有り、法要の後で出席者は其処に籠って密談を始めた。法事にしては雰囲気が異様なので住職が気にして会話を盗聴すると、是がクーデターの相談であった。慌てた住職は責任が及ぶことを恐れて江戸城に密告した。

大事が漏れて追っ手が来たので、一行は同族の太田三楽齋を頼り岩槻城に避難をした。此の時に三楽齋の盟友であった越後の上杉謙信は救援に向かう準備をしたらしい。二月に入って太田勢は葛飾で江戸城の軍と合戦をしたが勝てずに一族は散り散りとなり、三楽齋は石岡(八郷)に来たと思われる。法恩寺が在った平河町・永田町近辺では弓・槍・太刀での合戦は無くなっても政治的な権力の争いが現代も続いているらしい。権謀術数は何時の世も絶えることが無いのであろう。

ネアンデルタール人・新知見

菅原茂美

我々ホモ・サピエンスが原人ホモ・エレクトウスから分岐したのは、ほぼ25万年前。それよりほぼ10万年前、ネアンデルタール人は同じ親からアフリカで生まれ、その一部は今から2万4千年前、滅亡するまでヨーロッパ、西アジアなどで生息し、ホモ・サピエンスと数千年間、同じ地域で旧石器時代を過ごした。

洋の東西を問わず、昔から歴史の勝利者は、敗

者を酷くコキ落とす傾向があった。英語の Neanderthal は「愚か」「野蛮」を意味し、最初から見下げた命名であった。英国王立学会は、昔、新進気鋭の考古学者がアフリカで化石人骨を発見し学会報告すると、あんな野蛮な地で高貴な人類が進化するわけがない。少なくとも人類はヨーロッパで、特にこの大英帝国で進化したに違いない。…として、攻撃し、後にその発見がミッシング・リンクを埋める重大な発見であっても、日の目を見ずに終わった報告は多数あったという。

今日、ネアンデルタール人に関する最新科学による研究報告は多数あり、交流前から石器は当時のホモ・サピエンスと大差なく、大脳は我々より100%も大きく、装飾品や線刻画等クロマニヨンと大差がない。骨や歯石などから食べ物もほぼ同じ。言語中枢を司る遺伝子も、ならん劣るものではない。…との報告が次々発表されている。

それではネアンデルタールはなぜ滅亡したか？それは圧倒的な人口差である。少数の彼らは押し寄せてきた新人に混血吸収され、メラニン色素の多いサピエンスに青い目、白い肌、金髪等を残したとも言われる。ネアンデルタールの遺伝子は、現代人に平均21%残されている。

【特別企画】

打田昇三の『私本平家物語』

巻第三(一・一)

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」人間を含めて動物は敵と分かるものの他に正体の分らないものを恐れる。それに付け込んで怪しい宗教から危険な宗教まで商売として教祖が出現したのは先ず鎌倉時代初期、次は江戸末期から明治初期にかけて、さらに第二次大戦による敗戦の前後だと分析をされた学者が居られる。既成の権威、権力が崩壊して従来の価値観が否定されると不安に思う庶民を狙ってゴキブリのように新興宗教が湧いてくる。怪しい「教祖」「預言者」などが偉そうに登場するのが最初から「それがどうした？」と思えば驚くことは無いのである。野生動物は身を守るために生まれて直ぐに飛んだり走ったりする。人間も動物であるから、感性の鋭敏な者や何か他人に出来ないことが出来る者が居ても不思議では無い。

或る宗教団体の機関紙に教祖の神秘性を称える記事があり、その下に「歯が痛かったら直ぐ歯医者さんに行きましょう」と書いてあった。歯だけで無く具合が悪ければ教祖など、相手にせず、医師に診て貰えばよい。宗教が病院の役目を果たしたことなど無いのである。神仏を敬うのは心の問題であって「袈裟(けさ)と衣(えも)は心に着よ」「頭刺るより心を刺れ」などの諺もある。近代では「宗教」を利用して「政治」に進出する手近で自分の金は使わない方法があるからセコイ連中は其の手で「先生」などと呼ばれているが、神仏を出世の道具に使うほど罰当たりなこととは無い。

現代と違って、病気を治せる医師も居らず薬も無かった時代には「無病息災」「病氣平癒」「安産祈願」など保健所の管轄業務は主に僧侶が担当していたから僧侶の社会的地位は高かった。平清盛は自分に対

して謀反を起こそうとした者たちを処刑したり流罪に処したりしたのだが、その中には僧籍に身を置く者が居た。恨まれることは必然。

娘が高倉天皇の中宮となり天皇の子を身籠ったので、それを自分の出世の足掛かりにしたい清盛は止むを得ず流罪に処した者たちを出血サービスで赦すことにしたのである。残念ながら既に処刑された者は見捨てられたけれども、生存者は格別の恩赦で自由の身になることが出来た。ところが藤原成経らと三人で鬼界が島に流されていた俊寛僧都だけは、僧の立場を無視され、清盛がどうしても許さず孤島に一人置き去りにされた。

次の章段「頼豪」は、清盛の頃から百年ほど前の時代に一人の僧侶が御祈禱の功績で希望した褒賞が与えられずに憤死して怨霊になった話であり平家物語の作者は、其の事例から俊寛を許さなかった清盛を非難し平家没落の前兆としている。

頼豪(らいこう)のこと

白河天皇(在位一〇七二―一〇八六)が皇太子であった時に京極大殿と呼ばれた関白・藤原師實の娘・賢子(平家物語では兼子)が皇太子妃に充てられ、やがて天皇の即位により中宮(皇后)に立った。賢子は村上源氏・源頼房の娘であったが関白の養女として宮中に入ったのである。この女性は「けんしのちゆうぐう」と呼ばれ白河天皇の寵愛を一身に受けたことで知られている。

白河天皇は、この中宮に皇子が誕生するように願って、その頃に「有験の僧(うげんのそう)祈禱などで成果を出す僧侶」として評判が高かった三井寺(巻二、額

打論で登場した天台宗門派総本山・園城寺の頼豪阿闍梨(らいこうあじやり)阿闍梨は、土木工事資材のような名前であるが、仏教の師範・高僧のことを呼んで「そなたの祈願により、この后(きさき)に是非とも皇子が誕生するように致せ。祈願が成就した場合には望みどおりの勸賞(けんじょう)褒美を与えよう」と非科学的な約束をさせたのである。

是に対し頼豪阿闍梨は調子良く「たやすいで御座います」と引き受けて三井寺へ戻り、百日の間、一心に祈り続けた。原文では「肝胆を摧いてかんたんをくだいて」とある。真面目に努力したことは間違いない。その甲斐が有ったのか偶然なのかは証明の仕様が無いが、その百日の祈願の間に中宮・賢子さんに懐妊の兆候が現れ、承保元年(一〇七四)十二月二十六日に出産が無事で皇子が誕生した。ただし、先に言ってしまうと、此の皇子が皇位に就いた記録が無く、賢子さんが五年後に生んだ善仁(たるひと)親王が八歳で堀河天皇として即位している。

頼豪阿闍梨が祈願をした効果では無いと思うがとにかく賢子中宮が無事平穩に皇子を生んだから白河天皇は約束どおり「褒美の希望を述べよ」と言ったのである。そこで頼豪さんは「現金が良い」とか「献金の形にして」とか政治家並みに言えば良かったのだが、天皇の予想に反して「三井寺に戒壇(かいだん)を建てて頂きたい」とお願いしたのである。「かいだん」と言っても梯子(はしご)を掛けるのでは無く「僧侶に戒律を授ける儀式の執行権及び必要な施設の建立」―俗な言い方をすれば短期大学の三井寺を大学にして下さい…と言うような要求をしたのである。

是に対して白河天皇は「是は思いのほかの希望である。僧侶の階級を上げて欲しいとも言うかと思っていたのに…そなたに安産祈願を頼んだのは皇子

が誕生して順調に皇位継承が行われれば、国家が安泰で平和が保てると願ったからである。

それなのに、今ここで汝の希望を受け三井寺を昇格させれば、ライバルの山門(比叡山延暦寺の僧侶)が怒り出して双方の合戦になり、伝教大師・最澄が伝えた天台の仏教が滅びてしまうではないか!と言って許可しなかった。始め、三井寺園城寺は比叡山延暦寺の別院であったが坊主同士の喧嘩から一条天皇時代に三井寺が独立して、それ以来、天台宗同士で仲が良くなかったのである。

原本には無いが念の為に書いておくと「天台仏教」とは西暦五七五年(日本に初めて仏像が伝わった頃)に中国の天台大師(智顛(ちでん))が法華経究極の教えを展開した「摩訶止観(まかしかん)」による天台教典の教えであり、西暦七五二年(東大寺大仏開眼の年)に中国の法相宗と律宗の権威であった鑑真和尚(かんじんわじょう)が日本に渡ってきて齋した教義であるらしい。余り知られてはいなかったが、桓武天皇の庇護で仏教を学んだ最澄が比叡山で修行中に其の存在を知った…と言われる。最澄はそれを学ぶために中国に亘り、天台山で修行した。宗祖が苦勞して伝えた宗派でも中途半端な後輩の馬鹿坊主たちが意地の張り合いで喧嘩ばかりしていたことになる。

白河天皇は、三代・四十年以上に亘る院政を行ったことで知られるが「賀茂川の治水、双六のサイコロの目、比叡山の僧兵の三つだけは思うようにならない」と言って嘆いたそうであるから、比叡山を怒らせるような頼豪の希望に添えないことは分かるが、最初に「望みどおりの褒美を与える!」と約束をしているので責任はある。

頼豪は納得しない。悔しさの余り三井寺に帰りハングーストライキを決行して不満を表明しようと決

意した。死ぬ気である。これを聞いた白河天皇は慌てた。相手が御祈禱などにより成果を出すことで知られた僧侶であるから飢え死にした挙句に朝廷を呪うようなことになるかと手強い。そこで当時は美作守（みまさかのかみ）岡山北部の知事ながら後に太宰府の長や天皇の侍講（学者）となる大江匡房（まさふさ）を呼んで経緯を話し「そなたは頼豪阿闍梨と宗教上の子弟関係にあるそうだが、何とか説得をしてみるように」と命じられた。話が逸れるが此の大江匡房の孫か曾孫が後に鎌倉幕府で源頼朝の政治顧問になる大江広元であり、さらには子孫が戦国時代の毛利氏になる。

嫌な役目を押し付けられた大江匡房は三井寺に向かい頼豪阿闍梨の宿坊を訪ねて白河天皇の言い訳を伝えようとしたのだが本人が怒っていて話にならない。持仏堂に籠り護摩を焚き上げ、濛々（もうもう）たる黒煙の中でライゴウがライオンのように恐ろしい号声を出して叫びまくっていた。

頼豪阿闍梨は叫ぶ。「天子には戯れ（たわむれ）の言葉無し、綸言汗のごとし（りんげんあせのごとし）一度、口にした天子の言葉は取り消せない」と言うではないか：（私が要求した）是くらしいの望みも叶えて貰えないのであれば、私の祈禱によって無事に生まれた皇子には、私が怨霊となつて取り憑き悪魔の許に送り込んでやるぞ！」

此の状態を見た美作守は大急ぎで宮中へ戻り、見たまま、聞いたままを正確に天皇に報告した。呆れながら半信半疑であった白河天皇も、やがて頼豪阿闍梨が自ら飢え死にしたことを知ると大いに慌てて何とかしたいのだが、呪いを解く方法を知らない。其のうちに折角、生まれた皇子が病気がちとなった治療方法は御祈禱しかない。その頃、髪が真っ白な

老僧（の幽霊）が錫杖（しゃくじょう）修験者用の鈴付きの杖を持つて皇子の枕許に立つ有り様が、関係する人々の夢に現れるようになった。是は誠に恐ろしいことである。

結局、白河天皇と賢子中宮との間に生まれた敦文親王は、是まで述べたような頼豪阿闍梨の怨念の効果？に依つて承暦元年（一〇七七）八月六日に四歳で亡くなつてしまった。天皇の嘆きは当然であり原因は分かっているのだが、此の俣だと次に生まれてくる子も危ない。そこで白河天皇は比叡山から高僧を呼んで「どうしよう？」と相談をした。三井寺の頼豪に懲りて比叡山にした訳では無くて、この僧が第五十八代・光孝天皇の子孫で後に比叡山の座主・良信大僧正になる円融坊僧都であり祈願の効果が期待されていたからである。呼ばれた円融坊は自信もつて答えた。

「こういうことは何時も我が比叡山が得意とするところですよ。御祈禱は成就しなければ意味がありません。かつて村上天皇時代に時の右大臣・藤原師輔卿は天台宗第十八代の慈恵大僧正（後の元三法師・良源）を仏教の師とされていた功德に依り、娘の安子が村上天皇の皇后となり、後に冷泉天皇を生んだではありませんか：皇子誕生の祈願など、たやすいであります」：つまり、三井寺などに頼むから問題が起きるのです」と答えた。

円融坊は早速、比叡山に戻つて日吉山王（ひえきんのう）山王大師に全身全霊をもって（原文）肝胆を砕いて百日の祈禱を行ったのである。その効果なのか、頼豪阿闍梨の妨害が無かつたためなのか、賢子中宮は百日間で懐妊し、承暦三年（一〇七九）七月九日に無事、男児を出産した。お産も平安であった。生まれた子が白河天皇の第二皇子で善仁（たるひと）親王と

命名され、八歳で即位して第七十三代の堀川天皇となった。この天皇は若死にしたけれども、名君と称された。

このように、昔も今も怨霊の祟りは恐ろしいことである：にも関わらず、此の度、徳子中宮の懐妊に伴う恩赦で、平清盛が鬼界が島に流された俊寛僧都一人を赦さなかつたのは誠に残念で口惜しいことである。（平家物語の作者は、是が言いたくて頼豪阿闍梨の嘘話を長々と書いたのである）

治承二年（一一七八）十二月八日（第二次大戦で日本が米英両国に宣戦布告した日と同じであるが：全く関係は無い）に、平清盛の娘、徳子中宮が生んだ言仁（ときひと）親王は哺乳瓶を抱えたままで東宮（皇太子）に立てられた。守役である傳（つた）には内大臣・平重盛が、東宮坊の長官には中納言・頼盛が充てられた：と原文には書いてあるが、実際には左大臣の藤原経宗と平宗盛が其の任に当たつたようである。こういうこと？が正確に伝わらないというのは、やはり怨霊の仕業なのであるか？ 次の「少将都帰」では、心ならずも俊寛僧都を一人、孤島に残してきた藤原成経と康頼法師が都に帰ってくる。

少将都帰（しょうしょうみやこがえり）のこと

折角、怨霊になつて目立とうとした中途半端な頼豪阿闍梨の活躍？も時代の流れは運の強い者だけを中心に展開してゆくから歌謡曲の文句では無いが「♪これっきり、これっきり、もうこれっきりですか：」になり、話は治承三年（一一七九）の正月下旬に戻る。絶海の孤島で怨霊になる前に赦された丹波少将藤原成経と康頼法師こと平判官康頼の二人は、

一人だけ赦されなかつた俊寛僧都のことを心に掛けながらも、都への旅路についたのである。二人を乗せた船は、停泊地の肥前国加瀬庄を發つて有明海に出た。其処から一旦は鬼界が島に戻るようにして天草灘へ抜けてから九州北部を回つて日向灘へ豊後水道へ豊予海峡へ瀬戸内海に入るのである。長い航海になる。乗組員も船も急いではいるけれども、冬の海は寒風が吹き荒び波も高く浦伝い島伝いの航海で、ようやく二月十日ごろに備前児島に到着した。

この場所は卷二「阿古屋之松」で藤原成親が流され処刑される前に住んでいた場所といつたので息子の成経は、其の場所を訪ねて見ることにした。成経は康頼を伴つて行つたのだが、其処には粗末な家が壊れかかつてあり、竹の柱や古障子が残されていて、それに成親が書き付けたと思われる筆の跡が見られた。二人はそれを見て「人の形見には書かれた筆跡が一番に貴重である、と言うが、(藤原成親が)もし此処に書いて置かれなかつたならば、遺書ともいふべき筆の跡を見ることが出来なかつたであらう」と二人で障子の文字を読んで泣き、泣いては読みし

ていた。其の障子には「…安元三年(治承元年)捕えられた年七月廿日、出家(した)、同二十六日、信俊下向(卷第二、「大納言死去」に記載)」と書かれていたので、それによつて信俊が来たことを知つたのである。また、その傍の壁には「三尊来迎便有、九品往生無疑(さんぞんらいごうよりあり、くほんおうじょううたがいないし)阿弥陀如来や観音菩薩などに迎えて貰ひ、極楽往生する覚悟が出来た」とも書かれていたので、藤原成親が極楽浄土へ行くことを願つていたのでと知つて、嘆きは大きいながらも成経と康頼の二人は少し心が安らぐ思いであつた。

成親の墓は、それほど遠くない場所なので二人は墓参をして行くことにした。墓と言つても松林の中に、墓地らしい土壇も盛らず平地より少し高くしただけの場所であ

る。成経は袖を掻き合せるように身ずまいを正してから、生きている者に語ると同じに涙を流して言つた。

「既にあの世の方となられたことは鬼界が島で伝え聞きましたが、万一にも御無事で居られる望みも消えず、流人の身では其れを確かめることも墓参も生き抜くことが必死で今日まで過ぎてしまいました。此の度、二年を過ぎて召し返されることになり嬉しくは思いますが誠は此の世に生きて居られる父上の御姿を見てこそ嬉しく思えるのです。此処に来るまで心も急いでおりましたが、父上が亡くなられた事を現実知つた今は急ぐ甲斐ありません」

出来ず、また日々

確かに、父親が生きてさえいれば、今回の赦免を心から喜んでくれたで有ろうけれども、生者と死者と互いに言葉を交わせないほど恨めしい事は無い。苔むした土の下からは答えることが出来ずただ松林を吹き通る風が無情に響くのみである。

其の夜は、康頼入道と二人で念仏を唱えながら成親の墓の周りを右回りに廻つて供養を続け夜が明けから新しく壇を築き、墓所の柵を巡らし、墓の前に飯屋を造つて七日七夜の間は念仏だけで過ごした。さらに経文を書いて供え、最後の日には大きな卒塔婆を立てて、其れに「過去聖靈出離生死証大菩薩(かこしよりうりようしゅつりしようじしょうだいばさつ)死者の靈が生死の苦を離れて悟りを得られるように」と記し年月日と「孝子成経(父母の祭祀を行う子)」の文字を記した。是を見た者は、教養の浅い山の男たちも「子に過ぎた

る宝は無い」と感じて涙で袖を濡らした。

忘れてならないのは父母に育てて貰つた恩であるが是は夢の如く幻の如くであり、尽きがたきは恋慕の今の涙である。全世界の仏たちも(此の度の藤原成経の供養を)憐み給ひ、亡き父親、成親の亡霊も、さぞ嬉しかったことであろう。成経は「もう少し、供養をしていただきたいが都に待つ者たちも居り、さぞ待ち兼ねているであろうから、又の機会を得て墓参に来る」と約束して亡者に暇を乞ひ泣く泣くその場を立ち去つた。草葉の陰でも、さぞ名残惜しく思つたに違いない。源平盛衰記には康頼入道が「朽か果てぬ其の名ばかりは有木にて身は墓なくも成親の卿」と詠んだとしてあるが、安っぽい歌からして後代の付け足しである。

墓参で時を過ぎしたが、赦免された二人は三月十六日の明るいうちに鳥羽港へ着いた。此処には成親の別荘(洲浜殿)が在つたが暫く無住の為に土塀は崩れ、門の扉が無く、庭は荒れ放題で苔が生え、春秋と二つの築山の池には白波が立ち水鳥が泳ぎ回るようになつていた。此処に来ていた亡き主を偲ぶ恋しさに尽きない涙である。辛うじて建物が残されていたが竹の飾りは破れ、格子は剥がれて引戸、開き戸は無くなつていた。成経は居間に亡き大納言の面影を追い、開き戸に入りの父の姿を思い浮かべて「此の戸をこうして開けて」とか「あの木は自分で植えたもので…」などと言葉の中に思い出を悲しげに語るのであつた。

屋敷の主は居無くとも時節は春であるから山桃梅など木々の花は、時節を忘れずに咲いている。少将は花の許に立ち依つて「桃李言春幾暮、煙霞無跡昔誰栖(とうりものいわずいくばくかくれぬ、えんかあとなしむかひだれすむ)」寛弘年代(一二二頃)に編纂された「和

漢朗詠集」にある菅原文時の詩の一節と、後拾遺集にある「ふるさとの花の物いう世なりせばいかに昔のことを問はまし」の歌を口ずさんだ。此の様子を見ていた康頼入道も哀れに思つて墨染の法衣の袖を濡らした。

初め二人は日が暮れる迄と思つていたのだが、余りに名残が惜しくて夜が更けるまで別荘に居たから、荒れた屋敷のこと、夜になると古びた軒（のき）の隙間から洩れて来る月影が部屋の間々を明るく照らすのであった。やがて夜が明けて山村の朝を迎えるようになった。二人は帰路を急ぐこともなかったけれども、何時までも此の場に留まることも出来ず迎えに来る者たちを待たせるのも気の毒であると涙ながらに洲浜殿を發つて都へ帰ることにした。その心の中は哀れでは有るが嬉しさもあつたことである。

少将は勿論のこと、康頼入道も身分の有る立ち場であつたから迎への車が来ていたのであるが、それには乗らずに名残惜しいと少将の牛車に乗せて貰つて都へ入った。七条河原まで行つて、其処からは屋敷の方向が分かれるのであるが、どちらも別々に行くのが辛いので二台の牛車は動くことが出来なかつた。花の下で半日を過ごした友人とか名月を共に觀賞した友でさえも、また一樹の許に雨宿りをした者同士さえも別れの名残が惜しいものであるのに、この二人は長い歳月を孤島で過ごし、苦勞を重ねてきた間柄であるから、それぞれの人生が重なつてくるような思いであり、前世の因縁も浅からず思えて別れ難いのである。その中に待たされた牛が苦情を言つたようで、ようやく二人は自分の屋敷に向かうことになった。

丹波少将は、先ず、舅であり孤島暮らしを支えて

くれた平宰将こと平教盛の館に入った。少将の母親、つまり藤原成親の妻は神祇職の高官である中原氏の出とされるが、成親の逮捕以来、京都東山の靈鷲山（りょうしゅうざん＝釈迦の修行地になぞらえた聖地）に潜んでいた。後の世に豊臣秀吉の正室・禰々が建立した高台寺に近い場所のようである。成経が帰つて来るというので平教盛の屋敷に来ていたが無事に戻つて来た息子の姿を見て「命あればこそ息子の姿を見られた」と感激の余りに夜具を被つて伏してしまつた。

教盛の家中の者は女房、侍（さむらい）などが集まつて皆一様に喜びあつたが、特に少将の北の方（教盛の娘や「巻二」少将乞請」に登場した六条と言う乳母の心中（喜び）は如何ほど嬉しいものであつたらうか、計り知れない。尽きせぬ思い（心配）の為に未だ黒かつた六条の髪は真白になつていた。また美人であつた北の方も痩せ衰えて見間違えるほどに變つてしまつた。成経が流された時に三歳であつた子が、すっかりと大人びて髪を結うようになっていた。其の側に三歳くらいの子が居たので「あの子は誰か？」と質問したところ妻が「此の子こそ」と言つて袖を顔に押し当てて涙を流したので「さては…」と気が付き、分かれときに苦しげな様子をしていたのは其の時に懐妊していたのであり、流人暮らしの時に生まれたのが此の幼子であつたかと…留守の間に良くぞ育つたものと嬉しくも、思い出せば悲しい出来事であつたと当時を振り返つていた。

こうして流罪地から無事に帰還することが出来た丹波少将藤原成経は、以前の様に後白河法皇に仕えることが出来て、後に右近衛権中将、さらに源義経が奥州衣川で討死した年の文治五年には後鳥羽天皇の蔵人頭（くらんどのおとう＝秘書官長）に抜擢され、さら

に義父・平教盛と同じく参議に昇進した。しかし二年後には四十台で若死にしている。大きな声では言えないが、平家滅亡後のことであるから平家の怨霊か、或いは島に残された俊寛僧都の恨みかが影響した可能性はある。

平康頼入道は一人暮らししていた母親を引き取り（平家物語には書いて無いが）先に藤原成親の妻が潜んでいた東山の靈鷲山こと双林寺の近くに在つた山荘に籠つて自分の体験を「寶物集」という仏教説話集に編纂して出版することに専念したらしい。生没年不詳とされているが、そこそこに生きたようである。艱難辛苦の末に命拾いをしたのであるが、恨みを忘れたような歌が残る。

「ふる里の軒の板間に苔むして思ひしほどは漏らぬ月かな」（続く）

《ふる》

アンソング集・書芸会館料理のお母さん。

（ミター文化館通の）

看板娘（犬）「うらり」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-476-00000

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

（白井啓治方）

<http://www.furusato-kaze.com/>